

## 時間的指向性に関する概念整理の試み

—時間意識尺度の作成—

石井 僚<sup>1)</sup>

### 問題と目的

時間的展望とは、ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体 (Lewin, 1951 猪股訳 1979) のことであり、青年期の発達課題である自我同一性確立の基礎とされる (都筑, 1994; 渡邊・赤嶺, 1996)。時間的指向性はその一下位概念であり、過去・現在・未来の相互関係についての信念体系による過去の過去・現在・未来の重要性の順序づけ (白井, 1997) と定義されている。社会的自立という将来の目標を達成することが課題となる青年期においては、未来指向と自我同一性達成との関連が示されている一方 (白井, 1997), 園田 (2003) や吉田・小熊・小倉 (1990), 木村 (1982) は、青年期においても現在指向で生きることの意義を述べている。青年の発達と時間的指向性の関係は依然明らかにされていないといえる。

時間的指向性に関するこうした研究結果の不一致は、測定方法やそもそもの定義に起因している可能性がある。時間的指向性は、「あなたにとって一番大切な時は次のうちいつですか」と尋ねて、過去・現在・未来のうちから1つ選択させ、その時を選択した理由、また他のものを選択しなかった理由を書かせるという時間的指向性質問項目 (白井, 1997) によって測定されることが多い。この方法によって個人は5つのタイプに分類される。一方で河野 (2003) の事例研究では、時間的指向性は過去・現在・未来に対する個人の意識と定義され、個人が複数持ち得るものとして扱われている。現在指向の重要性を主張する園田 (2003) や吉田ら (1990), 木村 (1982) においても、未来への意識の重要性が併記されていることから、時間的指向性を複数の時間への意識として扱っていると考えられる。研究者間で定義が異なるなど、時間的指向性は概念的に未整理な状態であるため、研究結果にも不一致が生じていると思われる。

白井 (1997) の定義する時間的指向性は、河野 (2003) の定義する時間的指向性を包含する概念と考えられる。時間的指向性質問項目 (白井, 1997) は、選択された時間とその理由に関する記述から、その時間と他の時間とのつながりを判断してタイプ分けを行う。最も大切な時制を選ばせた後、他の時間とのつながりの有無によってタイプ分けするという測定方法からは、河野 (2003) が過去・現在・未来に対する個人の意識と定義する時間的指向性 (以下、時間意識とする) と、自分の過去・現在・未来がつながっているという実感と定義する時間的連続性とが混ざったものが測定されていると思われる。つまり、最も大切な時制を選択させるという方法によって過去・現在・未来の意識を相対的な順序として捉え、さらにその理由に関する記述から時間的なつながりの一部を捉えていると考えられる。定義に関しても、「過去・現在・未来の相互関係についての信念体系」という前半部分が時間的連続性を、「過去・現在・未来の重要性の順序づけ」という後半部分が時間意識を表していると思われる。白井 (1997) が定義する時間的指向性は、時間的連続性と時間意識の2つによって構成されていると考えることができる。

時間的連続性と時間意識は異なる概念であり、分けて測定する必要がある。時間的指向性質問項目 (白井, 1997) のようにこれらを合わせてタイポロジーとして捉えたと、選択された時間以外の時間意識を検討することができず、その結果、園田 (2003) や吉田ら (1990), 木村 (1982) が主張するような現在意識と青年の発達等との関連を検討することができない。さらに過去という時間に着目する有用性も指摘されているため (白井, 2001; 尾崎・上野, 2001), 各時間に対する意識をそれぞれ測定する必要がある。時間的連続性に関しては、他者との関係形成 (村田, 2009) や、精神的な健康 (Shostrom, 1968) との関連が指摘されており、石井 (2015) では尺度が作成されている。時間的指向性の中でも、時間的連続性と時間意識は青年の発達や適応の異なる側面を表すことが予想され、さらに時間意識に関しては各時間につ

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 氏家達夫教授)

いて検討することが必要と考えられるため、新たな尺度が必要である。

時間意識は、過去・現在・未来に対する個人の意識という定義からも、過去に対する意識、現在に対する意識、未来に対する意識の3つから成ると考えられる。河野(2003)の事例においてもそれぞれを過去指向性、現在指向性、未来指向性として、その強さについての議論がなされている。白井(1997)の測定方法においても、時間的なつながりの有無を除けば、過去指向、現在指向、未来指向の3タイプに分けられる。河野(2003)において考察されている複雑な時間体験に裏打ちされた現在指向といった時間的指向性の現れ方や、大橋・鈴木(1988)が過去展望と未来展望の関連性をあげていることなどから、それぞれの時間に対する意識の間には関連があると思われる。そのため、時間意識は過去意識と現在意識および未来意識から成り、それらには関連が想定される。

こうした構造が想定されることに加え、既存の尺度との関連も予想される。先述してきたように、白井(1997)の時間的指向性質問項目では2つの下位概念が混ざっていたり、量的な検討が不可能であったりするものの、この質問項目において過去指向に分類される群は、過去意識の得点が高く、同様に現在指向に分類される群は現在意識の得点が高く、未来指向に分類される群は未来意識の得点が高くなるという仮説を立てることができる。

時間的態度との関連も予想される。未来に対する時間的態度である「目標指向性」や「希望」は、未来に対する意識、つまり未来意識があることで持つことができる態度であり、これらの間には正の相関関係が予想される。同様に現在に対する時間的態度である「現在の充実感」を持つには、現在意識が必要であり、これらの間にも正の相関関係が予想される。しかし現在に対する意識は、河野(2003)でいうところの、突出して現在意識が強い状態においては必ずしも「現在の充実感」を感じているわけではないため、未来に対する時間的態度と未来意識との関連よりは純粋な関係ではなく、少し弱い関連となることが予想される。過去指向性に関しては、過去への意識が高い人が必ずしも過去を受容しているとは限らないため、相関関係は予想されない。

時間意識は、共に時間的指向性の概念を構成していると思われる時間的連続性との関連も予想される。2時点間の時間的連続性を認識するためには、その2時点それぞれに対する意識が必要である。つまり、2時点の時間的連続性が高い群においては、その2時点の両方の時間意識が高いことが予想される。具体的には、過去と現在の連続性が高い群においては、過去意識と現在意識の両方の得点が高いことが予想され、現在と未来の連続性が

高い群においては、現在意識と未来意識の両方の得点が高いことが予想される。

以上のことから本研究では、時間意識を測定する尺度の作成を行う。既存の測定方法に対しては、1項目と限られた情報のみから行われる評定者の評定に依存しているといった問題点が指摘されている(Shirai, Nakamura, & Katsuma, 2012)ため、複数の項目で量的な検討が可能な尺度を作成し、妥当性および信頼性の検討を行うこととする。妥当性の検討に関しては、探索的因子分析を行うことによって尺度構造の妥当性を、時間的指向性質問項目(白井, 1997)と時間的展望体験尺度(白井, 1994)、時間的連続性尺度(石井, 2015)との関連を確認することによって基準関連妥当性の検討を行う。信頼性の検討に関しては内的一貫性による検討を行う。

## 方法

### 調査協力者

A県内の私立大学およびB県内の公立短期大学の学生計199名。その内、欠損値を含むデータを除いた157名(男性77名、女性76名、不明4名；平均年齢19.46歳、年齢範囲18~26歳)を分析対象とした。

### 手続き

時間意識尺度の項目を作成するため、河野(2003)の事例や白井(1997)の時間的指向性質問項目を参考に、過去・現在・未来への意識を測定することが可能と考えられる項目を合計16項目作成し、時間意識尺度の暫定項目とした。教示は「以下の項目について、最近の自分の行動や考えにどの程度あてはまるか、「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までのうち、自分に最も当てはまると思う数字に○をつけてください。」とし、「1あてはまらない」「2どちらかといえばあてはまらない」「3どちらともいえない」「4どちらかといえばあてはまる」「5あてはまる」の5件法で回答を求める形式とした。

これらの作成した項目を用いて信頼性、妥当性を検討して尺度を作成するため、質問紙調査を行った。調査は大学の講義時間の一部を使い、著者が集団で一斉に実施した。調査は無記名で実施され、回答は任意であること、いつでも中断できること等をフェイスシートに明記した上、口頭での説明も行った。

### 調査時期

2013年10月。

### 調査内容

**時間意識** 先述した手続きによって著者が作成した16項目を暫定項目とした時間意識尺度を用いた。項目の回答形式は「1あてはまらない」から「5あてはまる」

までの5件法で、得点が高いほど時間意識を持つことが示されるように得点化した。

**時間的連続性** 石井 (2015) の時間的連続性尺度を用いた。この尺度は現在と未来のつながりを測定する「現在と未来の連続性」6項目と、過去と現在のつながりを測定する「過去と現在の連続性」4項目の2下位尺度、計10項目からなる。現在と未来の連続性は「未来があるから頑張ることができる」、過去と現在の連続性は「現在は過去の積み重ねである」などの項目からなる。石井 (2015) では本尺度の内的整合性および再検査法による信頼性と構成概念妥当性が確認されている。項目の回答形式は「1あてはまらない」から「5あてはまる」までの5件法で、得点が高いほど時間的連続性を持つことが示されるように得点化した。

**時間的指向性質問項目** 白井 (1997) の時間的指向性質問項目を用いた。「あなたにとって過去・現在・未来のうち最も大切な時間はいつですか。その理由も書いて下さい。」と教示し、大切な時間を過去・現在・未来のうちから1つ選択させ、その理由を記述するよう求めるもの。白井 (1997) では、構成概念妥当性や、時間的態度との弁別性による妥当性が確認されている。先行研究での分類方法に従い、選択された時間と記述の内容から、ポジティブな未来指向・ポジティブな現在指向・ネガティブな未来指向・ネガティブな現在指向・過去指向の5タイプのうち1つのタイプに個人を分類した。ここでの「ポジティブ」とは時間的なつながりを持つことを、「ネガティブ」とは時間的なつながりを持たないことを意味している。

**時間的展望体験尺度** 白井 (1994) の時間的展望体験尺度を用いた。この尺度は、未来に対する時間的態度を

測定する「目標指向性」5項目と「希望」4項目、現在に対する時間的態度を測定する「現在の充実感」5項目、過去に対する時間的態度を測定する「過去受容」4項目の4下位尺度、計18項目からなる。目標指向性は「私には将来の目標がある」、希望は「私の将来には希望がもてる」、現在の充実感は「毎日の生活が充実している」、過去受容は「私は自分の過去を受け入れることができる」などの項目からなる。白井 (1994) では本尺度の内的整合性による信頼性と構成概念妥当性が確認されている。項目の回答形式は「1あてはまらない」から「5あてはまる」までの5件法で、得点が高いほど時間的態度が肯定的であることが示されるように得点化した。

## 結果と考察

### 時間意識尺度の構成

時間意識尺度の暫定16項目に対して一般化した最小二乗法による因子分析を行ったところ、初期の固有値は、第1因子から3.39, 2.02, 1.74, 1.29, …であった。次に、固有値の減少状況と解釈可能性の観点から3因子を仮定し、一般化した最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。その結果から、どの因子にも負荷量が低い項目や、2つの因子に負荷量の高い項目、さらに項目の平均値や標準偏差、度数分布などから識別力も考慮して合計4項目を削除した。残りの12項目に対して、再度、一般化した最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。最終的な12項目の因子負荷量と記述統計量をTable 1に示す。

第1因子の寄与は1.97であり、第2因子への寄与は1.71、第3因子への寄与は1.46であった。第1因子には「今が大事だと思う」、「毎日が幸せだと感じる」などの5項目

Table 1 時間意識尺度の因子分析結果と記述統計量 (N=157)

	F1	F2	F3	Mean	SD
10. 今が大事だと思う。	<b>.67</b>	-.12	.08	4.15	0.85
8. 毎日が幸せだと感じる。	<b>.65</b>	-.02	-.05	3.35	1.02
6. 今を一生懸命生きている。	<b>.64</b>	.26	-.15	3.39	1.13
11. 目の前のことを意識している。	<b>.45</b>	.03	-.01	3.62	0.96
7. 現在を充実させたいと思う。	<b>.43</b>	-.12	.15	4.31	0.89
4. 人生設計を考えることがある。	-.01	<b>.80</b>	.02	3.32	1.15
1. 未来の自分を想像することがある。	-.05	<b>.64</b>	.04	3.52	1.24
2. 将来の夢がある。	-.02	<b>.61</b>	.04	3.22	1.36
16. 過去のことにこだわっている。	-.18	.13	<b>.66</b>	2.82	1.18
15. 昔に戻りたいと思う。	-.05	-.07	<b>.62</b>	3.27	1.39
12. 昔のことを思い出すことがある。	.14	.06	<b>.53</b>	4.08	0.95
13. 思い出にひたることが好きである。	.29	-.01	<b>.50</b>	3.50	1.24
因子間相関		.31	.12		
			.03		

Table 2 各時間的指向群における時間意識尺度得点の平均値と標準偏差および標準誤差 (N=157)

	現在意識			未来意識			過去意識		
	Mean	SD	SE	Mean	SD	SE	Mean	SD	SE
過去指向群 (n=6)	3.47	0.60	0.25	2.44	1.36	0.56	3.96	0.75	0.31
現在指向群 (n=119)	3.84	0.61	0.06	3.32	0.93	0.09	3.41	0.82	0.08
未来指向群 (n=32)	3.56	0.75	0.13	3.64	1.07	0.19	3.34	0.87	0.15

の負荷量が高く、第2因子には「人生設計を考えたことがある」、「未来の自分を想像することがある」などの3項目、第3因子には「過去のことにこだわっている」、「昔に戻りたいと思う」などの4項目の負荷量が高かった。第1因子に負荷量の高い項目はすべて現在について、第2因子に負荷量の高い項目はすべて未来について、第3因子に負荷量の高い項目はすべて過去についての内容であったため、第1因子を「現在意識」因子、第2因子を「未来意識」因子、第3因子を「過去意識」因子と命名した。因子間相関は第1因子と第2因子が.31、第1因子と第3因子が.12、第2因子と第3因子が.03であった。それぞれ負荷量の高い項目群で下位尺度を構成し、 $\alpha$ 係数を算出したところ、現在意識が.69、未来意識が.70、過去意識が.64であった。過去意識を中心として $\alpha$ 係数は全体的に若干低めの値にはなったものの、探索的因子分析の結果は理論的に想定された通りの3因子構造が示されており、時間意識尺度の構造的な妥当性が示されたといえる。因子間の関連については、現在意識と未来意識の因子間には想定された通りの相関関係がみられている一方、過去意識と他の意識の因子間には関連がほぼみられなかった。他の尺度との関連の検討も通して、過去意識に関して検討していくこととする。

#### 時間的指向性質問項目との関連

既存の尺度との関連を検討するため、時間的指向性質問項目において選択された時間によって、個人を過去指向群、現在指向群、未来指向群に分類した。各群の時間意識尺度得点の平均値と標準偏差および標準誤差をTable 2に示す。

時間的指向性質問項目によって分類された群の間で、時間意識尺度得点の平均値に差がみられるかを検討するため、時間意識尺度の各下位尺度得点を従属変数、時間的指向性質問項目によって分類された群を独立変数とした1要因3水準の分散分析を行った。その結果、現在意識 ( $F(2, 154) = 3.07, p < .05$ )、未来意識 ( $F(2, 154) = 4.01, p < .05$ ) を従属変数とした場合に群の主効果がみられた。Tukey法による調整を行った多重比較の結果、現在意識

得点については、現在指向群の方が未来指向群よりも高い傾向がみられた ( $p < .10$ )。未来意識得点については、未来指向群の方が過去指向群よりも有意に高く ( $p < .05$ )、現在指向群の方が過去指向群よりも高い傾向がみられた ( $p < .10$ )。過去意識を従属変数とした場合には群の主効果はみられなかった ( $F(2, 154) = 1.43, n.s.$ )。

各時間意識得点は、その時間の指向群において最も高い得点となっているが、統計的に有意な差であることが示されたのは一部にとどまった。現在意識得点において、有意差が見られた現在指向群と未来指向群の平均値差より大きな差である現在指向群と過去指向群との間に有意差がみられないという結果は、分散分析の前提条件である等分散性は統計的に仮定できているものの、そもそもの過去指向群の人数の少なさが影響を与えている可能性も否定できない。しかし、各指向群が他の指向群と比較して統計的に有意にその時間に対する意識を高く持つと示されないことは、他の指向群においてもその時間に対する意識を持っていることの現れであり、個人が複数の時間意識を持つことを傍証していると思われる。個人が複数持つ時間意識に関して、既存の尺度との関連がある程度示された。

#### 時間的展望体験尺度との関連

時間的展望体験尺度との関連を検討するため、時間意識尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度得点および総得点の相関係数を算出した (Table 3)。尚、時間的展望体験尺度の平均値と標準偏差、 $\alpha$ 係数はTable 4に示す通りである。過去受容の $\alpha$ 係数は少し低くなっているが、時間的展望体験尺度全体では.83という一貫性もみられているため、先行研究通りの尺度構成を用いた。

未来意識と、未来に対する時間的態度である目標指向性および希望との間に中程度の正の相関がみられた。目標を指向したり、将来に対して希望を持ったりすることには、未来への意識が関連していることが予想されるため、未来に対する時間的態度との間に正の相関が認められたことは、未来意識の収束的妥当性を示しているといえるだろう。また、現在の充実感や過去受容との間にほ

Table 3 時間意識尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度得点および総得点の相関係数 (N=157)

	目標指向性	希望	現在の充実感	過去受容	時間的展望体験尺度 総得点
現在意識	.13	.36***	.44**	.33***	.42***
未来意識	.62***	.45***	.20*	.12	.51***
過去意識	-.01	-.15	-.09	-.09	-.11
時間意識尺度総得点	.35***	.32***	.27***	.18*	.40***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 4 時間的展望体験尺度の各下位尺度の記述統計量と  $\alpha$  係数 (N=157)

	Mean	SD	$\alpha$ 係数
目標指向性	3.02	0.94	.82
希望	2.86	0.76	.65
現在の充実感	3.00	0.80	.72
過去受容	3.42	0.77	.58
時間的展望体験尺度総得点	3.07	0.59	.83

とんど相関がみられないことは、未来意識の弁別的妥当性を示していると考えられる。

現在意識と現在の充実感の間にも中程度の正の相関がみられた。予想された通り、未来意識と未来に対する時間的態度との間にみられた相関係数よりは相対的に低くなっている。これは突出して現在意識が強い状態（河野, 2003）や、刹那主義的な状態などにより、現在への意識が必ずしもそのまま充実感につながっていないためと考えることができる。また、希望や過去受容との間には低い正の相関がみられた。現在意識の項目内容には「毎日が幸せだと感じる」といった現在に対して肯定的なものが含まれている。現在に対して肯定的であることと、過去を受容していたり、将来に希望を持っていたりといった、過去や未来に対して肯定的であることにはある程度の関連が想像されるところである。現在に対する意識の中の、特に肯定的な側面と、過去や未来に対する態度の肯定的な側面との関連によって、希望や過去受容との間には低い正の相関がみられたと考えられる。過去や未来の時間的態度と多少の相関関係がみられ、現在に対する時間的態度との相関が最も高くみられているため、現在への意識を広く測定した現在意識に関しても一定の弁別的、収束的妥当性が示されたと考えられる。

過去意識は、どの時間に対する時間的態度ともほとんど相関がみられなかった。予想された通り、過去への意識と過去の受容とは関連がほとんどみられなかったため、過去意識の弁別的妥当性が示されたといえる。以上のことから、時間的態度を測定している時間的展望体験尺度（白井, 1994）との関連においても、本尺度の基準関連妥当性がある程度示されたと考えられる。

#### 時間的連続性尺度との関連

時間意識尺度の基準関連妥当性を確認するため、時間的連続性尺度（石井, 2015）との関連を検討した。時間意識尺度の各下位尺度得点の平均値を算出し、その平均値以上の得点群と平均値より低い得点群に分けた。時間意識の高低によって時間的連続性尺度の得点に違いがみられるのか検討するため、時間的連続性尺度の各下位尺度得点を従属変数、各連続性に対応する2つの時間意識に関して、両方の時間への意識が高い群、片方の時間への意識のみが高い群、両方の時間への意識が低い群の3群を独立変数として、被験者間計画の1要因分散分析を行った。片方の時間意識のみが高い群は、どちらの時間意識が高いかによってさらに2群に分けることが可能である。しかし、確認すべき時間意識の基準関連妥当性として想定されるのは、どちらか片方の時間に対する意識が低いことによって連続性が低くなるということであるため、上述の3群で検討を行った。時間意識の下位尺度得点の組合せによって分けられた群ごとの、時間的連続性尺度の各下位尺度得点の平均値と標準偏差および標準誤差をTable 5に示す。尚、時間的連続性尺度の平均値と標準偏差、 $\alpha$  係数はTable 6に示す通りである。

分散分析の結果、現在と未来の連続性を従属変数とした場合に群の主効果がみられ ( $F(2, 154) = 27.31, p < .001$ )、Tukey法による調整を行った多重比較の結果、両意識高群と片方の意識のみ高群との間、および両意識高群と両意識低群との間で有意差がみられ ( $p < .001$ )、いずれも両意識高群の平均値が高かった。また、過去と現在の連続性を従属変数とした場合にも群の主効果がみられ ( $F(2, 154) = 4.40, p < .05$ )、同様にTukey法による調

Table 5 時間意識下位尺度得点の組合せ群ごとの時間的連続性尺度の記述統計量および標準誤差 (N=157)

	両意識高群				片方の意識のみ高群				両意識低群			
	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>SE</i>
現在と未来の連続性	50	4.08	0.60	0.08	61	3.42	0.65	0.08	46	3.15	0.67	0.10
過去と現在の連続性	55	4.14	0.60	0.08	68	3.93	0.72	0.09	34	3.68	0.88	0.15

Table 6 時間的連続性尺度の各下位尺度の記述統計量と  $\alpha$  係数 (N=157)

	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	$\alpha$ 係数
現在と未来の連続性	3.55	0.74	.75
過去と現在の連続性	3.95	0.74	.74
時間的連続性尺度総得点	3.71	0.63	.80

整を行った多重比較の結果、両意識高群と両意識低群との間で有意差がみられ ( $p < .05$ )、両意識高群の平均値が高かった。

現在と未来の連続性に関しては、両意識高群が統計的に最も高い得点であることが示され、仮説通りの結果が示された。過去と現在の連続性を従属変数とした場合、両意識高群と両意識低群の間では有意差がみられたが、片方の意識のみ高群との間には有意差がみられなかった。先述したように、過去と現在の連続性における過去の認知は一樣でない可能性が高い。受容できない過去と、辛い現在との連続性を感じている場合などには、必ずしも過去と現在両方の意識を高く持つとは限らない。過去にこだわるなどの過去意識のみが高かったり、過去への意識は一切持たず、現在のみ意識を向けていたりする可能性が考えられる。そのため、片方の時間に対する意識のみ高群においても連続性の得点が高く、両意識高群との有意差がみられなかったと思われる。過去に関する意識内容については、場合によって詳細な検討の必要はあるものの、時間的連続性との関係においてもおよそ仮説通りの関係が示され、各時間への意識を測定する本尺度の一定の基準関連妥当性が示されたといえるだろう。

### 総合考察

本研究では、研究者によって扱い方が異なるなど概念的に未整理な状態であった時間的指向性を、時間的連続性および時間意識の2下位概念に分け、測定方法のなかった時間意識を測定する尺度の作成を行い、信頼性と妥当性が確認された。本研究に関連する時間的展望の概念はTable 7のように整理することができる。本研究において概念整理および測定方法の作成を行ったことにより、今後の時間的指向性研究は系統立てて行われていくことが期待される。

一方で、本研究において作成された尺度および示された概念間の関連の一般化については限界点もある。本研究における対象者はいずれも青年期後期にあたると思われる大学生であった。先述した通り、時間的展望の獲得期は青年期とされているため、その初期や中期、あるいはそれ以降の年齢や発達段階に対して本研究で作成された尺度を使用する際には、結果の解釈も含めて慎重になる必要があるだろう。

こうした限界点は残るものの、時間的指向性が時間的連続性と時間意識に分けて測定可能となったことにより、先述した先行研究における結果の不一致を検討することができると思われる。時間意識尺度はそれぞれの時間について量的な検討ができるため、青年の発達に対して白井 (1997) が主張している未来意識の大切さに加え、園田 (2003) などが主張する現在意識の大切さに関して、同時に検討することができる。またその際に、時間的連続性尺度 (石井, 2015) を組み合わせて用いることで、時間的指向性質問項目では検討できなかった過去と現在の連続性も含めて検討することができる。こうした検討を今後行っていくことで、先行研究で得られてきた知見が体系的に理解されることが望まれる。

時間的連続性と時間意識は、時間的指向性を構成するものとしてのみでなく、個別の検討にも意義があると思われる。未来への意識や現在への意識の動機づけに対する有効性が文脈に依存するといった白井 (1995) の研究や、達成動機との関連 (Sorrentino, 1973) といった研究からも、時間意識は主に動機づけとの関係が予想される。時間的連続性に関しては、親密な友好関係との関連 (柏尾, 1998a; 1998b)、さらには愛着や心理療法との関係も指摘されている (村田, 2008; 2009)。個別での検討も重ねていくことで、臨床的な問題も含め、青年の適応への貢献につながる可能性がある。先行知見の捉え直しと新たな知見を積み重ねていくことで、青年の発達や

Table 7 本研究に関連する時間的展望の概念整理

時間的展望
ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体。
A. 時間的態度
過去・現在・未来に対する感情的評価。
B. 時間的指向性
過去・現在・未来の相互関係についての信念体系によるところの過去・現在・未来の重要性の順序づけ。
B1. 時間意識
過去・現在・未来に対する個人の意識。
B2. 時間的連続性
自分の過去・現在・未来がつながっているという実感。

適応に対してさらなる有用な知見の確立が期待される。

### 引用文献

- 石井 僚 (2015). 時間的連続性尺度の作成 青年心理学研究, 27, 39-47.
- 柏尾真津子 (1998a). 青年期における時間的展望と対人志向性との関連 関西大学大学院人間科学: 社会学・心理学研究, 48, 57-70.
- 柏尾真津子 (1998b). 青年の友人関係と時間的展望との関連 関西大学大学院人間科学: 社会学・心理学研究, 49, 139-149.
- 木村 敏 (1982). 時間と自己 中公新書.
- 河野荘子 (2003). 青年期事例における時間的展望の現れ方とその変化—不登校を主訴として来談した2事例をもとに 心理臨床学研究, 21, 374-385.
- Lewin, K. (1951). *Field Theory in Social Science*. New York: Harper.
- (レヴィン, K 猪股佐登留 (訳) (1974). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 村田直子 (2008). 自己の時間的連続性に関する臨床心理学的考察 大阪大学教育学年報, 13, 55-65.
- 村田直子 (2009). 関係性から見た時間的連続性についての考察—心理療法における時間と他者 大阪大学教育学年報, 14, 51-61.
- 大橋靖史・鈴木明人 (1988). 非行少年の時間的展望に関する研究 犯罪心理学研究 (特別号), 26, 4-5.
- 尾崎仁美・上野淳子 (2001). 過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響—成功・失敗経験の多様な意味— 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 27, 63-87.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 白井利明 (1995). 時間的展望と動機づけ—未来が行動を動機づけるのか— 心理学評論, 38, 194-213.
- 白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房.
- 白井利明 (2001). 青年の進路選択に及ぼす回想の効果—変容確認法の開発に関する研究 (I)— 大阪教育大学紀要 (第IV部門), 49, 133-157.
- Shirai, T., Nakamura, T., & Katsuma, K. (2012). Time orientation and identity formation: Long-term longitudinal dynamics in emerging adulthood. *Japanese Psychological Research*, 54, 274-284.
- Shostrom, E. L. (1968). Time as an integrating factor. In C. Buhler & F. Massarik (Eds.), *The Course of Human Life: A study of Goals in the Humanistic Perspective* (pp.351-359). New York: Springer.
- 園田直子 (2003). 大学生の進路決定と現在指向 久留米大学心理学研究, 2, 63-70.
- Sorrentino, R. M. (1973). An extension of theory of achievement motivation to the study of emergent leadership. *Journal of Personality and Social Psychology*, 26, 356-368.
- 都筑 学 (1994). 自我同一性地位による時間的展望の差異—梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討— 青年心理学研究, 6, 12-18.
- 渡邊恵子・赤嶺淳子 (1996). 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望—学年差・性差の検討 人間研究, 32, 25-35.
- 吉田昭久・小熊 均・小倉美智子 (1990). Time Perspective と Personality と の 関 連 VIII —Time Perspective の心的構造— 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学, 芸術), 39, 7-73.

(2015年8月28日受稿)

ABSTRACT

An attempt to re-conceptualize time orientation:  
Development of the time consciousness scale

Ryo ISHII

This study aimed to re-conceptualize time orientation. This article is based on the premise that time orientation is theoretically constructed as time continuity and time consciousness. Time consciousness is defined as the individual's consciousness of his/her past, present, and future. The study also aimed to develop a time consciousness scale and examine its reliability and validity. Undergraduate students ( $N = 199$ ) completed a questionnaire consisting of the time consciousness scale that contained items developed based on participants' descriptions in previous time orientation studies. In addition, participants responded to 3 other scales assessing time orientation, time continuity, and attitudes toward time. An exploratory factor analysis of the items of the new scale identified 3 distinct factors: Present Consciousness, Future Consciousness, and Past Consciousness, as hypothesized based on existing theories. These subscales had adequate internal consistency. The results of testing the new scale's associations with scores on the other 3 scales showed optimal construct validity of the new scale. The new scale may serve as a useful tool for future research and may help explain the inconsistent results from past research.

Key words: Time orientation, Time, continuity, Time consciousness, Adolescence